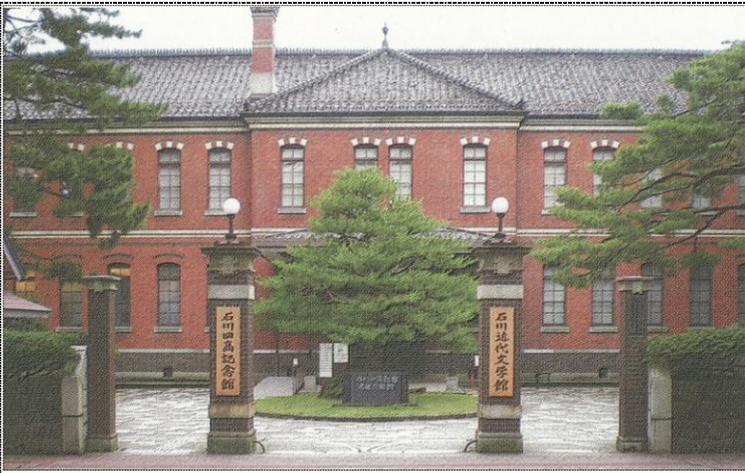


A c a n t h u s

第 3 1 号

平成 2 3 年 1 月 1 8 日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



旧四高本館（現石川四高記念文化交流館）

当活用委員会が毎年夏に行ってきた他県文化財校舎視察研修が今年度は、諸般の事情で実施できませんでしたので、冬休みを利用し、プライベートな旅行という形で、かねがね訪れてみたいと思っていた金沢に、有志数名で行ってきました。折からのクリスマス寒波に見舞われ、霽や雪の降る寒い金沢でしたが、お陰で趣のある雪の兼六園も観ることができました。お目当ての旧制第四高等学校本館はさすがに立派でした。

ライトアップされる赤煉瓦校舎

「学都」金沢のシンボルとなっている旧第四高等学校本館は、明治22年6月に起工され、同24年7月に完成した。設計は、当時文部技師であった山口半六、久留正道によるもので、赤煉瓦造り二階建ての建物である。明治27年には、第四高等学校（注）と改称し、創立以来約60年間数々の人材を政財界や学界に送り出してきた名門校であった。

旧四高は昭和25年、学制改革により閉校され、新制金沢大学法文学部と理学部の前身となった。四高本館は理学部のキャンパスとして昭和39年（1964）まで使用されていたが、その後は裁判所、郷土資料館などに利用されてきた。旧本館は昭和44年3月に国の重要文化財に指定され、熊本の五高などとともに、近代日本の高等教育機関の黎明を今に伝える全国でも数少ない建造物として貴重なものである。



旧四高本館内部（廊下）

本校旧本館より、十余年前に竣工した建物だが、堅牢な煉瓦造りで保存状態もよく、現在は、「石川四高記念文化交流館」として金沢を代表する文化の発信拠点としての機能を発揮している。旧本館は、四高の歴史と伝統を伝える展示に加え、旧四高の教室を多目的に利用できる「石川四高記念館」と石川県ゆかりの文学者の資料を展示する「石川近代文学館」によって構成されている。これは、兼六園周辺文化の森の新しい「学びとふれあいの複合文化スペース」として、平成20年に整備され、リニューアルオープンしたものである。



旧四高本館復元教室

旧制金沢二中は、本校とほぼ同時期に開校し、めざましい発展を遂げ、幾多のすぐれた人材を世に送り出してきた北陸地方きっての名門校であったが、戦後の学制改革に際し、閉校になってしまった。旧二中校舎は、昭和23年に発足した新制中学校の校舎に転用されることになり、



旧制金沢二中校舎（三尖塔校舎）

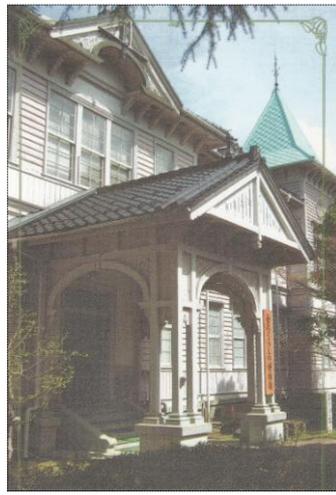
ど観光面での存在感も大きい。旧制石川県立金沢第二中学校校舎は、特徴的な尖った塔をもつ建物として「三尖塔校舎」の愛称で呼ばれている。明治32年（1899）、開校と同時に建てられたというから、本校旧本館より少し古い。この建物は、入り組んだ屋根、車寄せ、上げ下げ窓など明治の洋風木造建築の様式を色濃く残している。尖塔を有する屋根や煉瓦を積み上げた土台、縦長の上げ下げ窓など本校旧本館と共通するものが随所にみられる。

旧校舎は博物館に

ど観光面での存在感も大きい。

昭和45年まで金沢市立紫錦台中学校として使用されてきた。昭和49年に金沢市の文化財に指定され、昭和53年には「金沢市立民俗文化財展示館」として開館された。その後、平成11年に石川県有形文化財の指定を受け、平成19年に「金沢くらしの博物館」と改称され、金沢市によって運営されている。

旧制金沢二中本館専寄せ



旧四高校舎に比べ、地味な存在で、金沢市民の知名度もあまり高くない。兼六園前で拾ったタクシーのドライパーも、行き先に「旧制二中校舎」または「くらしの博物館」と告げても、しばらく思案顔をしていた。

建物は、明治の西洋風木造学校建築様式を残している立派なものだ。本校旧本館に比しても決して見劣りのするものではない。ただ、この施設をより有効に活用しようとするあまり、床を全面的に張替えたり、冷暖房設備を取り付けたりと、建物に手を加え過ぎてしまった。結果、国重要文化財としての基準を満たすに至らなかったのである。ちよつと残念なことである。

孤独な三尖塔校舎

もう一つ、訪れてみて感じたことは、

この旧校舎全体から「旧制金沢二中」の息遣いが伝わって来ないことだ。展示物として旧制中学時代の資料があまり無いことにもよるが、それだけが原因ではない。この由緒ある「三尖塔校舎」が戦後、市の新制中学校校舎として、旧制二中から切り離され、その後も、金沢市の公共施設としての利用が続き、旧制第二中学校校舎のイメージが薄れてしまった。

一般に、現金沢錦丘高校が旧制金沢二中を前身とした学校であると称されているが、果たしてそう言い切れるであろうか。昭和三十年代後半より、高校入学志願者の急増に因應するため、全国的に県立高校の新設・学級増が行われた。石川県でも昭和38年、石川県立高等学校設置条例により、普通科、家政科（募集人員普通科五百名、家政科百名）の全日制高等学校を金沢地区に新設されることになった。この際、金沢二中の同窓生諸子の間から後継校を切望する声が盛り上がり、県への働きかけを強め、この新設校を旧制金沢二中を継承する学校として発足させたのである。

金沢錦丘という校名は、旧金沢二中の校歌の文言から取り、校章も二中の梅鉢に4つのペンを加えたものを採用するなど、旧制金沢二中との一体感に努めきた。確かに名目的には後継校である。しかし、校地は二中時代とは別の場所であり、校舎も新築されたもので、旧制金沢二中を偲ぶ形あるものは皆無である。

一旦閉じられた学校が、長い年月を経た後再開校し、旧校の遺産を引き継ぐということは、そう簡単なことではない。学制改革後の空白期間が余りにも長過ぎ、その部分を埋め戻すのは容易ではない。

何とかあの「三尖塔校舎」で実際に学んだ卒業生たちが細々と二中の伝統を担ってきていたが、その彼らも今や高齢化し、旧制中学時代を語り継ぐOBの数はめっきり減ってしまった。先にも触れたように、二中の歴史が刻み込まれた明治の学び舎は、学校の手を離れて久しく、市の一施設になっている。「三尖塔校舎」はもはや旧制二中の後継校を称える錦丘高校のランドマークにはなり得ていないように思える。改めて伝統の継承の難しさを思い知らされると同時に、文化財校舎の在り様についても考えさせられた。



旧制金沢二中本館玄関ホール

(注) 明治期の官立(国立)の高等学校

明治27年(1894)、高等学校令が公布され一高(現東大)・二高(現東北大)・三高(現京大)・四高(現金沢大)・五高(現熊本大)が設置され、明治33年(1900)に六高(現岡山大)、翌34年に七高(現鹿児島大)、41年(1908)に八高(現名古屋大)が加えられた。

これとは別に、軍人養成学校として陸軍士官学校(明治7年創設)と海軍兵学校(明治9年創設)があった。

明治19年(1886)の帝国大学令により、北海道・沖縄県を除く全国を5区に分割し、それぞれに高等中学校を設置することが定められたが、このうち新潟・富山・石川・福井の北陸4県からなる「第4区」では、金沢に石川県専門学校(その前身は加賀藩の藩校明倫堂および維新後に設立された金沢中学校)を母体とする高等中学校が置かれることとなり、第四高等中学校の設立となった。(開校に際し旧藩主前田家は7万8千円を寄附している)さらに設立時に金沢医学部を「四高医学部」として合併したが、後に金沢医学専門学校として分離した。

雪の兼六園

